

「ために」と「ように」に関する一考察

梅岡 巳香・庵 功雄

要旨

「ために」と「ように」は共に目的を表す類義表現であり、その使い分けが問題となることが多い。両者の使い分けについては、「ために」は意志動詞に付き、「ように」は無意志動詞に付くという記述が一般的だが、従属節の主語が3人称で、従属節で描かれる出来事が主節の主語の意志によって実現可能なものである場合には「ように」の節に意志動詞を使うことができる。ただし、この場合も「ように」の節はその節の主語の意志を表しているわけではなく、出来事を叙述しているにすぎない。こうした現象は意志動詞と無意志動詞との違いが通常考えられている程はつきりしたものでないことを示している。

キーワード ために、ように、意志動詞、無意志動詞、主語の意志

1 はじめに

日本語学習も初級の終わり頃になると、一つのことを表現するのに用法が異なる文法がいくつか出てくる。概してそれらは、初級段階で学ぶ語彙での例文からは、その違いが理解しにくいものである。学習者の母語でそのような細かな分け方がなされていないと、学習者は大いに戸惑うであろう。教科書による違いはあるだろうが、初級後半には、受身、使役、敬語など様々な難しい文法が並んでいる。それに加えて、細かい違いのある文法を学ばなければならないのであるから、教師側も効率よく教えていかなければならない。

そのようなひとつに、「ために」と「ように」があげられる。いずれも目的をあらわす文法項目として、初級後半に出されることがある。本稿では、これらの違いにどのようなものがあるかを考察し、どのように学習者に提示することが理解への近道であるかを考える。

2 「ために」と「ように」に関するこれまでの研究

はじめに、先行研究で「ために」と「ように」の違いをまとめたものとして前田(1995)を見てみる。前田(1995)は「ために」「ように」「しに」「のに」という4形式を詳しく比較したもののだが、その内、「ために」と「ように」に関する従属節が動詞の部分だけを見ると、両者の違いは次のようになる。

(1) ために：主節と従属節の主語が同一。従属節の動詞は意志動詞。

ように：主節と従属節の主語は異なる。従属節の動詞は無意志動詞。

このことは次のような例からわかる。

1-① 早く病気を治すために手術を受けた。(前田(1995))

1-②*早く病気が治るために手術を受けた。

2-① 早く病気が治るように手術を受けた。(前田(1995))

2-②*早く病気を治すように手術を受けた。

1-①は主節と従属節の主語が同一で従属節の動詞が意志動詞であるため文法的であるが、1-②はどちらの条件も満たさないため非文法的になっている。一方、2-①は主節と従属節の主語が異なり従属節の動詞が無意志動詞であるため文法的であるが、2-②はそのどちらでもないため非文法的になっている。

一方、庵・高梨・中西・山田(2000)は基本的に(1)と同じ分類をしているが、「ように」に関しては主節と従属節の主語が同一でもよいとしている。まとめると次のようになる。

(2) ために：主節と従属節の主語が同一。従属節の動詞は意志動詞。

ように：主節と従属節の主語は異なっても同一でもよい。従属節の動詞は無意志動詞。

主節と従属節の主語が同じものの例としては次の例が挙げられている*1。

3 子供が進学できる {○ように / ×ために} 貯金した。

なお、意志動詞であっても否定形の場合には「ように」が使われることが前田(1995)、庵・高梨・中西・山田(2000)で指摘されている。これは次のような例からわかる*2。

4-①* (私が) 花瓶を割らないために、私はそっと持ち上げた。

4-② (私が) 花瓶を割らないように、私はそっと持ち上げた。

5-①* 子どもがピーマンを残さないために、母は料理を工夫した。

5-② 子どもがピーマンを残さないように、母は料理を工夫した。

3 先行研究の問題点

さて、(2)によれば「ために」と「ように」は従属節の述語が意志動詞か無意志動詞かによって使い分けられている。これは次のような例を見ると正しいように見える。

6-① (私が) 食べるために、私は机の上にパンを置きました。

6-②* (私が) 食べるように、私は机の上にパンを置きました。

7-①* (私が) 食べられるために、私は机の上にパンを置きました。

7-② (私が) 食べられるように、私は机の上にパンを置きました。

しかし、次のような例はどうだろうか。

8-①? 子どもが食べるために、私は机の上にパンを置きました。

8-② 子どもが食べるように、私は机の上にパンを置きました。

どちらも間違いとは言えないかもしれないが、6-①、②の場合とは反対に、前件と後

*1 庵・高梨・中西・山田(2000)では次の例を主体が同じものの例としているが、これは主体が異なるものの例と考えることもできる。

<1> はして食べられるように肉を小さく切っておいてください。

*2 次のように「ために」と否定形が共起すると「ために」は原因・理由を表すものと解釈される。

<2> メンバーが全員来なかったために、私たちは試合に出られなかった。

件の主語が異なるこの例では、「ように」を用いた8-②の方が、すわりがよい文に感じられる。つまり、(1)(2)の記述とは異なり「ように」が意志動詞と共に使われることもあり得るのである。

4 分析

ではなぜ8-②のような文が文法的になるのだろうか。この文と9-①を比べてみよう。

8-② 子どもが食べるように、私は机の上にパンを置きました。

9-① 子どもが進学 {?する/できる} ように、(私は) 貯金した。

(庵・高梨・中西・山田(2000)を一部改)

すると、9-①では(2)の記述の通り) 意志動詞は使いにくいことがわかる。ここで「ように」は「ように」の節で表される事態を引き起こすべく主節の主語が動作を行ったという意味を表すように思われる。このことは8-②、9-①に対応する使役文を作ると「ために」が使えることからわかる。

8-③ (私が) 子どもに食べさせるために、私は机の上にパンを置きました。

9-② (私が) 子どもを進学させるために、私は貯金した。

ここで8-②と8-③の従属節の内容を比べるとどちらも「子どもが(パンを)食べる」ということであることがわかる。一方、両者の違いは、8-③では従属節の事態(「子どもが(パンを)食べる」)の実現に対する主節の主語(「私」)の働きかけ(意志性)が強く感じられるのに対し、8-②では従属節の事態が起こるべく主節の主語が準備をしたというニュアンスが感じられる点にある。この場合、従属節の述語は意志動詞であるが従属節全体は従属節の主語(「子ども」)の意志を表しているというよりは「子どもが(パンを)食べる」という事態を叙述していると見ることができる。

一方、主節と従属節の主語が同一で特に1人称である場合には6-②のように「ように」は使えないが、これは1人称が主語であることによって意志動詞が(1人称の)意志を表すことになるためである。

6-②* (私が) 食べるように、私は机の上にパンを置きました。

では、8-②と9-①の許容度の違いはなぜ生まれるのだろうか。

8-② 子どもが食べるように、私は机の上にパンを置きました。

9-①? 子どもが進学する ように、(私は) 貯金した。

この違いは従属節の事態の実現に対する主節の主語の関与性の違いに由来するのではないかと思われる。つまり、「机の上にパンを置く」ことで「子どもがパンを食べる」ことを実現させることは可能だが、「貯金をし」ても「子どもが進学する」ということが実現するとは限らないのである。ただし、9-①を次のように変えると許容度が上がる。この場合の「進学する」は「進学する気になる」という意味になっている。

9-③ 子どもが進学する ように、家族全員で励ました。

このことからこうした場合「ように」の節はその節の主語の意志を表しているわけではないことがわかる。

このような点から8-①、②を再度考えてみよう。

8-①? 子どもが食べるために、私は机の上にパンを置きました。

8-② 子どもが食べるように、私は机の上にパンを置きました。

すると、「ように」には子どもの自発的な意志があるかどうかは関係ないのであり、「食べる」動作主である子どもの自発的な意志を感じさせない。だから従属節の主語の意志を積極的に表す場合には「ために」が使われると説明できる。

10-①* 子どもが嫌いなピーマンを食べるために、私は料理を工夫した。

10-② 子どもが嫌いなピーマンを食べるように、私は料理を工夫した。

「嫌い」のような言葉が入れば、子どもが「食べよう」という積極的な意志をもって食べるかどうかがよくわかる。

つまり、「ように」と共に意志動詞を用いる場合は、他者からの働きかけを受けて(あるいは感じて) その行為をすることになったという、一種の例外と考えてよいだろう。

5 まとめ

「ように」と「ために」の最も大きな違いは、前件の動詞、すなわち「ように」と「ために」の要求する動詞である。「ために」には意志動詞を、「ように」には無意志動詞を用いる。ただしこれは原則なので、このような条件のわかる例文を提示すればよい。混乱を避けるために、8-②のような例外的な「ように」は提示しない方がよい。また、「ために」は前件と後件の主語が同一であることもつけ加えておく。

次の段階で8-②のような文を例に、前件と後件の主語が異なっても「ように」は主語の意志が非常に弱くなること、後件の主語による働きかけが強いことを教えればよい。

表にまとめると以下ようになる。

	前件の主語=後件の主語	前件の主語≠後件の主語
意志	私が <u>食べるために</u> 、私はパンを置いた	子どもが <u>食べるように</u> 、私はパンを置いた*3 (cf. 子どもに <u>食べさせるために</u> 、私はパンを置いた)
無意志	私が <u>食べられるように</u> 、私はパンを置いた	子どもが <u>食べられるように</u> 、私はパンを置いた

6 無意志動詞とはどのようなものか—今後の課題—

「ように」と「ために」を正しく使い分けるには、前件の動詞が「無意志」か「意志」かを見分けなければならないが、我々は母語の使用の際、常にこのようなことを意識している

*3 「ように」は前件の主語の意志が弱くなる点で、「ために」とはやや異なる意味を含む。

わけではない。ましてや、日本語が初めて学ぶ外国語だという学習者もいるであろうから、そのような学習者にとっては、「ように」と「ために」の違いを学びながら、その続く動詞が「意志」か「無意志」かを見極めるのは、至極困難なことであると思う。

他動詞は全て意志動詞である。しかし、自動詞には「行く」「走る」のような意志動詞と「ある」「降る」のような無意志動詞がある。しかし、「間に合う・間に合わない」は無意志動詞であるが、「遅刻する」は意志動詞である。意味から捉えると両者は似たような意味でありながら、異なるグループに入るので、やっかいである。

自動詞と他動詞も外国人学習者には困難であるが、動詞の意志、無意志の場合は、それが辞書に書かれていないだけに更に困難であると予想できる。

我々は「意志動詞」「無意志動詞」という言葉を安易に使っているように思う。これらの定義を学習者にとって理解しやすいものにする必要がある。

【参考文献】

- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 前田直子(1995)「スルタメ(二)、スルヨウ(二)、シニ、スルノニ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版

